

＜株式会社エフエム東京 第379回放送番組審議会＞

1. 開催年月日:平成 23 年 6 月 7 日(火)
2. 開催場所 :エフエム東京 本社 10 階 大会議室
3. 委員の出席:委員総数7名(社外7名 社内 0 名)

◇出席予定委員(7 名)

青 池 慎 一 委員長 渡 辺 貞 夫 委員
内 館 牧 子 委員 香 山 リカ 委員
秋 元 康 委員 西 田 善 太 委員

◇欠席委員(1名)

横 森 美 奈 子 副委員長

◇社側出席者(8 名)

富木田 代表取締役社長
唐 島 常務取締役
黒 坂 常務取締役
石 井 常務取締役
小 谷 常勤監査役
小 林 執行役員編成制作局長
延 江 編成制作局局次長 兼 番組制作部長
森 田 編成制作局局次長 兼 編成部長

◇社側欠席者(0 名)

【事務担当 小林放送番組審議会事務局長】

4. 議題:

番組試聴「SCHOOL OF LOCK!」 (ダイジェスト版) 約 20 分azsx

2011 年4月 13 日(水) 22:00～23:55 放送分

《議事内容》

議題1:最近の活動について

◎ 4月聴取率調査結果について

2011年4月度の聴取率調査結果が発表されました(調査機関4月18日～4月24日)。今回は12～69歳個人全体で数字を伸ばす結果となりました。また、12～59歳男女のリーチ(1週間に当該局を5分以上聴いた人の割合)については、NHK、中波を含めた全在京局中首位となりました。メインターゲットに関しては、M1は前回同率でしたがF1は上昇となり、ラジオ聴取率の高い月曜～日曜デイトム(9時～18時)では在京局中首位になりました。今回調査では全局平均聴取率合算値が徐々に上昇となり、災害時に存在価値を増すとされていたラジオメディアの特性を証明することになりました。

◎ 5月の番組展開について

大災害発生以降2ヶ月余りが経過しましたが、世情は引き続き震災余波の中にあり、リスナー心理のあり方を鑑み、5月以降もTOKYO FMは編成コンセプトであるヒューマンコンシャスの理念に則った編成方針での放送を継続しております。さらに5月は新たなフェーズとして、夏の節電対策、被災地の風評被害の防止、ヒューマンコンシャスの理念を具体化するライブイベントなどを実施致しました。以下に5月の主だった取り組みをご紹介します。

●5月のゴールデンウィークには、各日様々な切り口で災害支援のホリデースペシャルを編成しました。①4月29日13:00放送『ヒューマン・ケア・プロジェクト～Re Style Life～』では、「みんなで節電アクション！」をテーマに、サマータイムの活用術など7つの節電アクションをわかりやすく紹介。②同日15:00放送『ベジスタイル』では、福島県の風評被害の影響を受けている農家取材し、応援企画として福島県産のお米をTOKYO FM地下1階にあるジョグリスで販売するアクションを起こしました。③5月3日はオペラシティーにて、ピアニスト横山幸雄氏によるショパン・ピアノソロ完全奏破コンサートを翌日深夜3時まで随所で生中継を挟み、U-STREAMにてライブ配信を実施。復興支援の思いを込めた演奏に多くの反響を頂きました。④5月5日は『Sound for Children ～LOVE MUSIC～ powered by Plan Japan』を放送。こどもの日に、「音楽で未来を担う日本と世界の子供達にLOVEを届けよう」をコンセプトに、坂本九さんの長女・大島花子さんが「上を向いて歩こう」を生演奏するなど、子供たちに聞いてもらいたい音楽を届けました。

●平日ワイド番組『シナプス』(月～木 13:00-16:00)では、「海外から見た東日本大震災」という切り口で、海外メディアが震災、原発問題をどう伝えたか、違った角度からリスナーに問題提起しました。また5月23日には、パーソナリティーのやまだひさしが台湾から生放送し、“Thank you for the support”というテーマのもと、今回多くの義捐金を集めてくれた台湾への感謝の気持ちを伝え、一体なぜここまで日本のことを想ってくれるのか、様々な取材を通じて台湾の日本に対する心温まる取り組みを紹介しました。

●平日ワイド番組『LOVE CONNECION』(月～金 11:30-13:00)では、アイルランドの4人組女性ユニット「ケルティック・ウーマン」とのコラボレーションで、3年ぶりの来日となった5月26日にTOKYO FMホールでの復興支援ライブを開催。大ヒット曲「You Raise Me Up」を公開レコーディングし、日本語の歌詞も加えられた「絆バージョン」を披露。ここで収録された楽曲をTOKYO FM携帯サイトで着うたフルとして配信。売上全額をJFNヒューマンコンシャス募金として、被災された方への支援活動に役立てるといふ、海外アーティストと番組がひとつになってのチャリティー企画を実施しました。

◎ 東京メトロ「Listen! WONDERGROUND」について

今年度の5月より、FM放送の枠を超えた、新たなマルチメディア展開も開始致しました。東京メトロの年間キャンペーンをTOKYO FMがプロデュースし、東京の生活者と東京メトロ、そしてTOKYO FMの番組を繋ぐ、スマートフォン向けの番組「Listen! WONDERGROUND」の配信をスタートさせました。メトロで移動する間に、車内で楽しめる事を想定した約15分前後のプログラムとなります。ウィークデー・バージョン(月曜から金曜までの5日間)は、東京メトロ沿線で生活する人々の紹介や、東京を舞台にしたドラマと音楽で構成されています。ウィークエンド・バージョン(土曜、日曜)は、空中都市をモチーフにした、ファンタジードラマを配信。物語が進むにつれて、現実のメトロ全線のポスター展開と連動し、「宝探し」企画に発展します。この番組のナビゲーターは、夕方のワイド番組「シンクロシティ」(月～木 16:00-18:45)のパーソナリティー、堀内貴之が務めております。「シンクロシティ」を拠点番組に、アプリの波及を目的としたベルト・コーナーを設置(17:18~17:28)。配信番組の約半分のコンテンツを放送しております。残りのコンテンツを含む完全版を聴くには、スマートフォンからアプリをダウンロードしなければならず、そのアプリを通じてコンテンツの完全版が再生できる仕組みとなっております。さらに、このアプリ番組へ誘導するポスターが、メトロ構内、メトロビジョンに多数掲載、露出され、新規リスナー開拓の一端を担う施策にもなっております。





【委員の意見および社側説明】

(「○」委員意見／「■」社側説明)

○台湾からの支援の話があったが、彼らがいったいなぜ日本のことをここまで思ってくれるのでしょうか。

■1999年、2006年に台湾が被災したときに日本からの支援があったということがまずあると思う。

○東京メトロの企画は構内で聴けるといったことはあるのか。

■特に構内のみで聴けるといことはない。今回の企画は、放送で現実の東京の声を紹介し、さらに聴きたい人にはアプリをダウンロードしていただき、別の世界に来てもらうという仕組み。

○ポスターはあまりよくない。あの中吊りを読んで分かる人はいない。青はあまり目立たないカラー。

■逆に中吊りに青が少ないので目立つという意味もある。

○文字ばかりで絶対に分からないと思う。もし自信があるのなら調べてみたらいかか。ダウンロード数があるならよいが。駅で電車に乗る前に 15 分の番組をダウンロードし、電車の中で聴くという理解でよいのか。

■ダウンロードしながら聴ける。地下鉄で聴くのが目的だが、地下鉄じゃなくても聴けるので、試作としてポスターを見るとヒントが分かる宝探しゲームなどの仕掛けも行っている。

○聴取率調査について、大変よかったと感じていると解釈してよいか。

■まだまだであると考えている。だが、今回は 12-69 歳でかなり数字を伸ばした。ここまで伸びたのは 5 年ぶりくらい。また、聴いている人の数・リーチが伸びたというのは今後に期待が持てる。

○基本的には土台ができあがってきたということか。

■ターゲットである F1、M1 については課題が残る。

議題2: 番組試聴

【番組名】「SCHOOL OF LOCK!(スクール・オブ・ロック!)」

(ダイジェスト版)

【放送日時】2011 年 4 月 13 日(水) 22:00~23:55 放送分

【番組概要】

“未来の鍵を握る学校”をコンセプトに、ラジオの中に開校したもう一つの学校として、2005 年 10 月よりスタートした 10 代むけのワイド番組「スクール・オブ・ロック!」。“未来の鍵探し”をテーマに、毎晩、全国の若者たちと心の交流を図っています。そして、3 月 11 日。東日本大震災の余波は、ラジオの中の学校にまで及びました。連絡が取れなくなってしまった生徒。そして、天国へ行ってしまった生徒もいました。震災 3 日後から、通常のレギュラー編成で放送を開始したスクール・オブ・ロック!は、番組の指針を「心のライフライン」と定め、避難所・被災地に身を置く、生き延びてくれた 10 代リスナーたちと、直接電話で繋がりはじめました。家や家族、友達や学校、日常生活や思い出を失ってしまったリスナーたちと幾晩も話しをしてきました。彼ら彼女らの「側に寄りそう」ことを、一番大切にして、涙と一緒に笑い声も交えながら、「また、明日!」という言葉投げ掛け続けました。今日、お聞き頂くのは、震災から約 1ヶ月経った 4 月 13 日に放送した番組内容の一部です。痛みと自粛ムードが蔓延して来た頃、番組宛のメッセージに「こんな時に、すみません」という言葉が目立つようになってきました。(「こんな時に、言いにくいんですが、フラれました。／ギターが欲しいです。等)

それを受けて、番組では、過剰な自粛ムードをかき消すように、「こんな時だからこそ、“未来”の話しをしよう」と、投げ掛けました。こんな時だからこそ、話して欲しい、みんなの夢の話。将来の話。次世代の日本を担う10代に聴く、「将来、この国をどんな国にしたいか？」等の話も飛び出します。今回は、番組に出演してくれたリスナー4人のうちの2人分のパートを聴いて頂きます。1人目は、岩手県宮古市のリスナー(アッシュ君)。家業の船も養殖も流されてしまった16歳の男子。目指していたサービス業の夢が、震災後に変化を遂げました。2人目は、故郷が福島県南相馬市の(マルシカク君)。現在、東京で浪人中。彼も、震災を経て、人生の目標が大きく変わった若者の1人です。最も未来に近い、「今」を生きる若者たちの「未来のカケラ」をお聞き下さい。

【委員の意見および社側説明】

(「○」委員意見／「■」社側説明)

○基本的にこの番組は好き。登場した「アッシュ」のような子は、作り手の手が届かないような才能を持っている。自分の言葉や表現力があって、気負いが無い。ラジオの作り手が偉いのか、「アッシュ」が偉いのか、「出会ったこと」が偉いのか。このような番組フォーマットがあると、こういうことが出てくる。もう一人のリスナー「まるしかく」との会話もよかったが、校長教頭がうまい。馬鹿な夢も含めて許容してあげている。前半は涙目になってしまった。

○この番組は聴いている人たちも考えたのではないかと。むしろ被災地以外の人たちへの影響があるのではないかと。精神科医として気になることは、震災を経験した人に対してこちらから「どうだった？」と聞くことによって、つらいことを思い出させてしまい二次被害になる場合があるということ。質問することでさらに負担を与えてはいけないと考えてしまう。そういう意味で今回の番組は「振り返ってください」ではなく「未来を考えよう」としていたのがよかった。若い人たちと話すとき、こちらがどこまでピュアで熱く話しているのか分からず、按配がむずかしい。この番組はそのバランスがすごくうまくいっている。これは計算してやることではなく、ある種直感でやることなので、以前は続くかどうか疑問だったが、きちんと続いているので、偶然や奇跡ではなく、考えがあってのことなのだろう。笑わせながら大事なことを伝える方法の按配を教えてほしい人は沢山いると思う。いつかプロデューサーが言語化してまとめてくれたらよいと思う。

○とても面白く、すごい番組だと思った。この場を提供し続けてきたからこそ口を開くりスナーが出てきたのだと思う。テレビではこのような人材は絶対に出てこない。とくに 1 番目の子。「いい番組作りますよ」と身構えていない。秘密は校長と教頭の掛け合いにあるのだと思う。この 2 人は決してうまくない。限られた時間の中で、重複したり、終わった話をもう一度言うというのは気持ちの悪いことなのに、この番組ではそれが実に自然に感じた。誰かへの思いというのは理路整然ときっちりまとまってるわけではない。話が終わりかけたところで、突然またさっきの話題を持ち出す。それがリアリティだと思う。変にまとまることなく、それぞれの本音が出てきているところが面白い。あまりきれいにまとまらず、行ったり来たりできるのがラジオの魅力だと思った。

○やはりこの番組はよい。いろんな人に聴いてほしいので、もっと有名な番組になってお父さんお母さんにも聞いてもらえるようにする必要がある。校長教頭の掛け合いがすごい。私は「絆」という言葉があまり好きではないが、そんな言葉を使うよりもよほど「絆」を感じることができる。東北というとすぐ「忍耐」「粘り強い」という話になる。それはあまりにステレオタイプなよくある言葉だ。今回は東北でこれだけの災害が起きたが、この災害が日本のどこか別のところで起きていたとしても、人々は同じ態度を取っただろう。東北の人たちの個性は確かにあるが、周りが言うのは行き過ぎている。登場したリスナーが南相馬の人間であることを隠すのではなく、「地元で国際ボランティアセンターを作りたい」と言うところまで持っていったのは校長教頭の方だ。この番組では若い人たちが「～します！」など断言していた。最近の若者の話し方はとてもあいまいで断言しない。断言すると自分に帰ってくる責任も大きいし、きついやつだと思われるのもいやだからだと思う。しかしこの 2 人は断言し、それを受けた校長教頭が「すごい」と褒めた。本当にいい番組だ。

○少し上から目線なのが気になった。先生だから目上の立場にはなると思うが、子どもたちに対して話すところが、もう少し子どもたちの同じレベルのところに気持ちを持って行って対等にしゃべってくれたらよかった。もう少しやさしく接することができればもっといい番組になるのではないかな。

○若者との接点を持つこの番組を、長期にわたって持続してきたということで、力を発揮していると感じた。突然これだけ若者が参加するわけではない。長くやってきたからこそ登場したリスナーのような子が現れたのだと思う。校長も教頭も若者を分かっている感じがする。この 2 人からはいろいろ学ぶことも多い。教頭先生が校長先生よりいばっているのが面白い。意識しているのかどうか分からないが、それがこの 2 人の掛け合いを面白くしている。校長先生が絶対的な存在だったら面白くない。いずれにしても若者との接点を持つ番組を続けてきたすばらしさが今回の結果につながった。

5. 放送番組審議会の内容について

審議会の意見は、放送番組審議会事務局から各担当部長に伝達した。

6. 公表

議事内容を以下の方法で公表した。

① 放送:番組「JOGLIS SUNDAY」

6月26日(日) 5:00～7:30 放送

② 書面:TOKYO FM サービスセンターに据え置き

③ インターネット:TOKYO FM ホームページ内 <http://www.tfm.co.jp>

7. その他

次回審議会7月5日(火)に開催することを決めた。